学位論文要旨

人口減少が進む日本の農山村では担い手確保が喫緊の課題である。農村の担い手とは農業経営、農作業、地域資源管理、むら社会の担い手を意味し、農村社会はこれらの多様な担い手によって維持されてきた。従来は農村地域に居住する者を担い手として捉えていたが、今後は居住していないものの地域に関わろうとする担い手、つまり関係人口を積極的に位置づけていく必要がある。関係人口は、移住まではいかないものの、農村部に通う人材として近年注目されるようになったが、まだ新しい概念であり、それらの研究は取り組みが始められたばかりである。一方で、関係人口の地域の実践は、都市と農村の交流、地域おこし協力隊や学生のインターンシップを受け入れてきた地域の取り組みの延長線上として実施されていることも多く、関係人口について研究を進める上では、都市農村交流や外部人材の活用に関する研究が基盤となる。

先行研究を整理したところ、関係人口によって地域にどの程度効果があるのかといった貢献度の把握に関する研究はあまりみられなかった。また、関係人口の主体ごとのステップアップの過程を明らかにする研究を蓄積していく必要がある。したがって、本研究では以下の 3 点を研究課題に設定した。なお、本研究は農村における関係人口、つまり農的関係人口を捉える研究であり、農村の特徴として、より地域に根差した担い手の確保が必要である。したがって、他出者も関係人口の一員として位置づけ、本研究では、関係人口の主体は、縁故のない者（都市農村交流の参加者及び新規就農者）、縁故のある者（他出者）に着目した。

研究課題 1 は、関係人口の貢献度への注目、とくに農作業における貢献度の把握である。研究課題 2 は、新規就農者の主体形成の過程を把握することである。事例分析の調査対象地は、長野県飯田市とした。飯田市は全国的にもいち早く体験教育旅行や農村ワーキングホリデー（以下、農村 WH）といった都市農村交流に取り組んできたことで、多くの関係人口を創出している。農村 WH の受入農家へのアンケート調査を実施し、調査結果から対象者を抽出し、より詳細なデータを収集するためにヒアリング調査を実施し、農村 WH のリピーター参加者の貢献度の可視化を行った。さらに、農村 WH を通じて、飯田市で新規就農した者を対象にアンケート調査及びヒアリング調査を実施し、新規就農者の有形・無形資源の確保の過程を把握し、農村 WH 参加後の新規就農までの過程を分析した。

研究課題 3 は、他出者の主体形成の過程を把握することである。全国的に早い段階から人口減少がはじまった一方で、移住者の確保にも全国に先駆け、行政をあげて対策に取り組ん

できた島根県を対象地に設定した。近年では、I ターンと U ターンを明確に切り分けて、人材還流（進学・就職を機に出身地を離れた後に U ターンする人材の育成）に力を入れているという特徴があり、島根県は U ターン促進先進県でもある。事例分析にあたっては U ターン者を対象にアンケート調査とヒアリング調査を合わせて実施し、詳細な分析を行った。

事例分析から、次のことが明らかになった。1 点目は、農村 WH のリピーターは移住まではしないが、農作業の担い手として十分な役割を果たしているということが明らかとなった。2 点目は、農村 WH は関係人口の階段のステップアップを促すプログラムとしての機能を果たしており、新規就農を目指す者にとっては就農に必要な資源を確保することができるといったことが明らかになった。3 点目は、他出者が関係人口という立場で農村の担い手としての活躍を促すため、また実際に U ターンした後に農村の担い手としての活躍を促すためには、ふるさと教育や公民館活動の充実など他出前の出身地での経験が重要であるといったように、I ターンとは異なる取り組みが必要であることを提示した。

本研究では、持続可能な農村の地域づくりのあり方を考える上で重要な「多様な担い手像」について、関係人口の概念を用いて整理し、特に農村の根幹を成す農村の担い手が農的関係人口および新規就農者等として主体形成される関与プロセスについて、事例分析を通じて明らかにした。また、居住実態を持たない農的関係人口が、実際の農作業に対して果たしている役割の一端についても、労働力の可視化を通じて明らかにした。関係人口については幅広い解釈が可能であるがゆえに、ともすれば関係人口の主体として語られることの多い都市側からの目線が協調されるあまり、肝心の地域からみた際の存在意義が等閑視されることも少なくない。農的関係人口とした際には、地域に根差した関係人口をつくることが重要であり、とくに出身者は明確に位置づけていく必要があるだろう。持続可能な農村をつくっていくのは、あくまで地域住民が主体であり、外部の力を活用するという視点を見落としてはいけないと考える。

農村資源は観光の資源でもあり、その資源の担い手を確保するために関係人口は重要な担い手の一種であるため、観光学研究領域において農的関係人口による担い手確保は重要な論点になりうる。したがって、観光学研究において関係人口の理解に対する基本的な視座を与えるという点で本研究は観光学研究に貢献しているといえる。